

# 奈良暮色

九条 之子

「えっ！参道って、こっちだったの？」

「当り前じゃない！ほら、みんなこっちの道歩いているでしょ！わざわざ、ここで曲がってあっちに行く人なんて、ママくらいのもんよ」

娘に言われて、返す言葉もない。一月二日、夕暮れ時。奈良興福寺の参道の入り口である。お正月に奈良に来るようになって今年で三度目だが、娘と一緒にするのは初めてである。

私は、一人旅が好きだ。海外も一人で行く。いつもは、気楽な一人旅。でも、参道に気が付かなかったみたいなの失敗を、我知らず重ねているのかもしれない。

「うわっ、五重の塔って、素敵！ねえ、写真撮って！」

バックから、スマホを取り出す。娘が写真、写真というのは前からだが、私もスマホに代えてから、グッと写真が好きになった。送ったりするのが、楽だからだ。写真嫌いだった私を、写真好き、とまでは言わないまでも、普通に写真を撮る人間に代えてしまったスマホの力というのも凄いものだ。

「塔の上が切れちゃってるじゃない！ほんとにママって、写真下手ねえ」  
下手で当たり前だ。写真なんて、どこへ行っても、ほとんど撮ったためしがないのだ。

ヒイクターを通してではなく、自分の目で見る。それを信条としてきた私だ。とは言え、写真のおかげで、塔を見上げて、つくづく眺めたような気がする。なんと、夕暮れが似合う塔であろうか。

「見上げてごらん夜の星を」という歌がある。この時ばかりは、五重塔に、たまには空を見上げてごらん、と言われているような気がした。

金堂から国宝館へ。私の胸は、高鳴って来た。今年も、「阿修羅像」に会えるからだ。不思議なことに、娘は、まだ、阿修羅像を見たことがないという。

「えっ、そんなイケメンの仏像があるの？」

国宝館に入っても、そうそう簡単には阿修羅像にはたどり着かない。しつかり、コースの終わりに飾られているからだ。

「へえ、確かに、カワイイ！」

仏像には常に辛口の批評を並べる娘も、「阿修羅君」には、さすがに感嘆の声を上げた。

仏像は、いつ来ても変わらないのがいい。去年の私と、今年の私とは、違っていい。でも、阿修羅君はいつまでも変わらない。

「むかしの人も、今と変わらない顔をしてたんだねえ」

と、私達の後ろにいたおばあさん達が話していた。

(おばあさん、それは違う！阿修羅君の顔は、むかしのインド人の顔よ)

だって、仏像はインドの方から、渡って来たんだから。口には出さないが、後ろのおばあさんに向かって、私は言ってやりたかった。

阿修羅像を見ると、決まって思い出す一人の青年の顔があった。

それは、私が勤める日本語学校にかつて在籍していた、インド人留学生の顔だ。

その名は、ダルビッシュ、ではなくて、ラケツシュ、と言った。

ラケツシュは、私の日本語学校に初めてやって来たインド人留学生の一人だ。インド人留学生は、母語のみではなく、公用語の英語も出来るので、日本語は三ヶ国語目の言語である。それ故か、彼が話す「日本語」は、実に流暢だった。

最も、非漢字圏の学生は、漢字に頼らないだけ、話すことが上手だ。人間は万国共通で、自分が得意なものに頼り、不得手なものは敬遠する。それにしても、ラケツシュの日本語は、絶品だった。また、彼にはスター性があった。サングラスをかけると、まるで、映画に出てくる「マフィア」のようだった。

「今朝、学校に来る途中、『拜島駅』で、警官に呼び止められたんです！学生証を見せたら、『すみません』と彼は言いました」

まるでマフィアのようなルックスの外国人が、こぼれるような笑顔とかわいげ溢れる日本語で明るく答えたのだから、警官も、さぞ、びっくりしたことだろう。

彼らが来日したばかりの四月の終わり、ゴールデンウィークの始まりの前日に、バス二台を連ねてドイツニーランドに行った。ラケツシュ達インドの学生と、バンダラディツシュの学生達を引き連れて、「カリブの海賊」を手始めに、全アトラクション制覇を目指した。

「次はどこ？」

ビッグサンダーマウンテンの真下で、私達はガイドブックを広げていた。

その時、私は、上方から強い視線のようなものを感じた。

ビッグサンダーマウンテンを仰ぎ見ると、中腹辺りの列の中に、ひときわ大きな人がいて、強い視線は、どうやらその人から送られたようだった。私の視線と彼の視線が、空中で絡み合った次の瞬間、彼は私に向かって、小さく頭を下げた。

その大きな人は、どうやらインド人らしかった。彼は、上から、私達を眺めていたのだ。

そして、彼には分ったのだ。はしゃいでいる若者達の何人かがインドからの留学生であり、その輪の中にいて、大きな声を張り上げているのが教師であることを。

私が彼に向かって、頭を下げると、彼はさっきよりも、更に深く頭を下げた。

「インドの学生をよろしく、頼みます」

「わかりました。任せてください」

山の上と下とで、私達は視線だけで言葉を交わした。

心は、国も言語も関係なく、一瞬にして通じるものであることを感じた瞬間である。

旅の終わりは、「唐招提寺」である。「唐招提寺」は、夕闇に包まれていた。

中学校の教科書に載っていた「天平の甍」という井上靖の小説は、その題名の爽やかさゆえに、限りなく青い空を連想させた。子供の頃によく歌った「甍の波と雲の波、重なる波の中空を」という、こいのぼりの歌を口ずさみたくなるような小説だった。少なくとも、教科書に掲載されていた部分は。が、今回読み返してみて、その印象は、一変した。

主役は、鑑真というよりも、むしろ、日本人留学僧であり、苦節何十年を経て、目的を達成する者あり、また挫折する者ありという、途方もなく重い話であった。時代こそ違え、まさに私の学校に来ている留学生達の日本版の物語である。

平成十五年の開校から二年ほどたった頃、朝鮮族の中国人であり、韓国語も話す、

かなり優秀な学生がいた。文法の時間に、「〴〵ものだ」を使って文を作らせたことがあった。

「僕は、子どもの頃、よく、いい子だと言われたものです」

という文を作り、クラスメイト達の失笑をかったのが、懐かしく思い出される。

彼は、来日前に、祖父と祖母に言われたそうである。

「私とおばあさんは、日本へ行って五年間、一生懸命働いた。そして、お金を貯めて、韓国へ戻った。店を持ち、今がある。だから、お前も……」

祖父は、一生遊んで暮らせるぞとまでは言わなかったそうだが、日本へ行ったら、何とかなるということは言ったそうである。だが、時代は変わり、日本へ来ただけではどうにもならなくなり、帰国を余儀なくされたり、最悪の場合、不法滞在者になってしまったり、という者もいる。

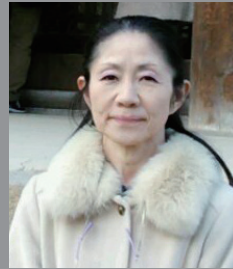
それでも留学生達は、それぞれに憧れと希望を持って日本へやって来る。だが、奈良時代の留学生のように「命がけ」で来るような学生は、当然ながら、一人もいない。今、留学生達は母国から数時間で成田空港に降り立つ。夏休みや冬休みには、「バカンスを楽しむ」風に帰国をする者も珍しくはなくなった。

金堂の前で、近くにいたカップルに頼んで、娘と二人の写真を撮ってもらった。そうだ。中学三年の修学旅行の時、全く同じ場所で友達と一緒に写真を撮ったのだ。た。

その時、私は、十五歳だった。

時代は変わる。人の心も移ろう。

変わらないものは、かつて都であり、天平人達が闊歩した、奈良の街を包む夕闇だけかもしれない。



一九五五年一月二十六日生まれ 静岡県沼津市出身  
静岡県立沼津東高等学校から早稲田大学政治経済学部政治学科卒業  
現在、東京平田日本語学院 教務主任

受賞歴

「ぼくのはつ恋」で毎日児童小説小学生部門優秀賞 受賞

「青い麦わら帽子」で毎日児童小説中学生部門優秀賞 受賞

第九回「文芸思潮」エッセイ賞 入選

著書

二〇〇三年七月、新風舎より「黒ねこは知っている」

二〇一二年十二月、日本文学館より「ヴィーナス」を出版